

フォルニーヨのア
ンジェラ Angela
da Foligno の精袖

Koizumi Tomomi
小泉友美

目次

フォーリーニョのアンジェラの精神的放棄	Abandonspirituel	1
---------------------	----------------------------	---

フォリーニョのアンジェラの精神的放棄 Abandon spirituel

フォリーニョのアンジェラ (1248-1309) は、13 世紀のフランシスコ会のキリスト教女性神秘主義であり、贅沢な日々を送るなか、ある日人生の虚無と地獄への大いなる恐れを感じて、回心の道に入る。子ども達、夫と次々家族を失ってゆき、あまたの精神的試練を受けながら、キリストに従うために祈りと断食、弱者への奉仕に生きた。

フォリーニョのアンジェラの精神的放棄 abandon spirituel は、心身感覚の浄化の道であり、最後に Dieu カミとの合一体験へとつながっていった。精神的な浄化の道において、魂と身体感覚が壊されてゆき、絶え間ない疑惑という暗闇に堕ちながらも、キリストの愛によって光へと導かれていった。

この精神的放棄の道は、1350 年頃に執筆された著作「メモリアル Méorial 回想録」内で、主に 3 つの語彙によって表現されていった。

虚無、闇そして死である。

虚無 Vanitas とは、キリスト教の否定神学 (カミは善でもなく、公正でもなく、真実でもないといったような逆説的な考え方をしてゆく神学) において、むなしいこと、こころに何も感じないことを意味する。

闇 Tenebrae とは、すべてが暗く、光が見い出せない状態にあること。

死 Mors とは、苦しみや絶望の状態において、心身的能力が行使できないこと。

この 3 つの語彙を中心とした「メモリアル」のテキストを土台として、フォリーニョのアンジェラの精神的放棄 Abandon spirituel を創作風にアレンジして、簡潔にまとめた。

わたしの回心の道、苦行の道、試練の道の一步は、罪を識ること。そして、地獄に堕ちてゆく恐怖に震えるところ。すべてのこころの彩どりは、まるで踊りの歩に似て。

美しく髣髴のよったドレスや、堇の香水瓶はいつしか一滴も残らない、空っぽとなって鏡台の前に転がるままに。愛しい夫や息子たちと次々と死別してしまって、いつの間にか孤独にあっても、こころの片隅にほっとする気持ちは隠せないでいる。

片足はこの移し世に、もう一方の足はすでに天の元にあることに気付いたから。わたしの魂はキリストの魂と合わさりながら、さらにわたし自身としてあること。

もうなにもかも投げ出して、衣裳箒箒を勢いよく閉じて、とことん貧しくなりたいと思う。

食を断ち、極寒に震えても、天の母の苦しみに抱かれたまま、十字架の受難へと重なってゆく。

どんな時でも苦しい時は、キリストの十字架の受難を観想して、満点の星の下、うつくしい夢によって慰められる。この魂の奥深くに、甘美な感覚が湧きあがって行くまま、眼が覚めたり、そのまま微睡んだりして、辛さや哀しみすべての感情がまざってゆく。色とりどりの夢、ことば、幻が繰り返されて、ひとり静に独房に座って、聖書のことばを円やかな優しさに包まれながら、一語一語囁み締めてゆく。わたしの魂は闇の内に在って、行ったり戻ったりを繰り返しながら、前進することも、後退することもできない。突然、歓喜と光に満ち溢れてゆくを感じる。魂は閉ざされた闇から解き放たれ、地面にうつ伏して、さらなる深い淵に落とされてゆく。

最後まで突き進んでゆき、この深淵に抱かれたい。あまりにも恐ろしいどん底に降りてゆく時、すべての希望を捨てなくてはならない。

この闇はとてつもなく恐ろしいもので、すべての悪徳は枯れ果ててしまっている。外へ外へと、そして内へも、勢いを取り戻して来ている悪霊を跳ね返らせて、わたしがこの闇のなかにある時、苦しみぬくよりも、地獄の炎に焼き焦がされることを望み、よって、叫び、のたうちまわり、早く死を迎えられるよう、キリストに祈るのみ。

目の前が真っ白となるような乾いた暑さのなかで、6つの翼を背中に生やし、両掌両足に4つの聖痕を顕わにした聖フランチェスコが、重い十字架を背中に背負ってこちらへと、歩を進めてくる。

すれ違うとともに、わたしの魂に鋭い痛みが電流のように全身にはしっていった。

貞潔、清貧、従順の3つの誓願の結び目が左右に揺れるとともに、わたしの両掌と足にも聖痕を受けた。

振り向けども、後ろには誰もおらず、ただオレンジ色の太陽が燦々と照るなか、十字架がここに深く刻まれてゆくを感じたのである。

虚無 Vanitas の体験

わたしの「虚無 Vanitas」の体験とは、カミの虚無とつながってゆき、恐らく、死の直前の断末魔の叫びとなるであろう。

「おお、見知らぬ底無しの虚無!

おお、見知らぬ底無しの虚無!」

おそらく、根源の、無垢で純粋な状態に戻ることを願って、至高の存在である父とその息子キリスト、胸に抱えられた聖霊の三位一体の人生の道程。

二重の底無しの淵にこそ、カミの果てしなき虚無が広がり、わたしの魂の虚無が合わさってゆく。

この目の眩むような三位一体の神秘体験を味わうには、すべてを失い、すべてを疑うままに、最後の最後まで祈りを唱えて、底しれぬ深みの果てまで追いやる。

本当に、ここでは理解することのできないことん深い淵。

こうして、わたしはさらなる虚無の深淵へと落ちてゆき、なにも感じない、わたしのここにこそ、死なないようでいきる意味を識った。

闇 Tenebrae の体験

わたしの魂は闇のなかにあり、未来のあるべき姿に戻ってゆきたいけれど、それが叶わない。魂は前進することも後退することもできない。わたしの魂は歓喜して、光に輝いて、カミの強い存在を感じながら、はじめてカミの意思を識る。

ただちに魂はこの闇から引き離されて、闇のなかで地面に横たわるまま。わたしがこの闇のなかにある時、至高な存在のために苦しむことを焼き焦がされるままであるよりも望みたい。よって、わたしは叫び、わたしは悲鳴をあげて、いかなる手段においても、死を待ち望むのみ。

闇の中でも、全身全霊の祈りに専念してキリストがすべてとなる。

カミはわたしを疑わずに、ともにある。わたしの希望はつよく、この闇に包まれていても、祈るのみ。

闇のなかで密かに感じて、闇のなかでキリストを見て、すべてはあるがままに。そしてすべては闇のみ。

闇のなかにカミを感じるとき、震えも、激情も、身体も、魂も、献身も、微笑もなにも無い。

なにも見えない。

身体は眠って、言語は断たれてしまうのみ。わたしがこの闇のなかにある時、カミの人やすべての人間らしさを想い出せずに、かたちあるものも思いおこさずに、すべてを見て、かつ、なにも見ない。

闇のなかにあってこの顔やこの両眼を見るのである。

死 Mors の体験

幾度も死にたいと思う。

死にたいと叫びたい。

こころの奥深く、穏やかな苦痛を覚えて、その感情があまりにも大きすぎてわからない。身体が引き裂かれないように、ただひたすら死にたいと願うのみ。いきるということは、わたしたちの息子たちや母親を失なった、死の体験よりも辛いもので、想像以上のこころの苦痛を覚えてしまう。わたしが感じることはことばでは表現出来ず、かたちとならずわたしが見るものはかたちとならずに、よって、いきるということはまた、死ぬということ。だから、カミよ、わたしの元に来て！

キリストの胸に口づけをして、屍のように両眼を閉じて仰向けになるキリストを眺めている。

唇は、きゅっと固く閉ざされて、両眼もぎゅっとつぶり、まるで墓に埋葬された死人のように、わたしの身体はあまりの苦痛と嫌悪感に襲われるまま、その苦しみを避けるために死に身を委ねようとする。

この床で、キリストは生まれ、生活し、そして死んでいった。

わたしがこころに感じるものは、言葉にならず、わたしが見るものは引き裂かれたくない。よってわたしはいきる。わたしにとって死ぬこととはなに？

あなたの元にわたしを引き寄せてください。

あれ程、死にたいほどの苦しみがようやく穏やかになっていった。それでも死にたいという願望は、なくなる。わが魂は哀しみの内に死にゆき、すべての人々がこの苦しみを味わなくてはならない。わたしはひたすらに、生きながらすでに死者として生きることを望み、あなたのすまいが天にありますように。

この顕世において、あなたは肉体に支配されて、名誉も、美貌も、死にはかなわない。あなたは外からの影響に流されずに、紛争に身を費やすことなく、ただひたすらに屈辱に堪えるのみ。

わたしたちの憂くべきことを背負って死んでいったキリストのために泣きましょう。何故ならば、わたしたちの罪ゆえにキリストはお苦しみになられるのだから。

見ず知らずの愛よ、なぜに? なぜに?

なぜにわたしを棄て去るの?

十字架にかけられて見棄てられたキリストに向かってこう叫ぶ

見ず知らずの愛よ、なぜに? どうして? どうして? どうぞ、わたしを見棄てないで! 見ず知らずの愛よ、なぜにわたしを見棄てるの?

ただひたすらに恥も外聞もなくこう叫ぶ。

なぜに? なぜに? どうして?...

いつしか、一本の樹もない広漠な丘には、粗末な木の十字架が立ち並んでいて、今はもう亡き面影を追いながら、両腕に抱えた満開の花束に顔を埋めては、涙にむせる。

わたしの失った愛する夫やこども達のしづやかに閉じられた両脛を指先でたどるようにして、こうして、わたしの十字架の道は過去の回想を捨て去り、ようやく軽くなったころにはいっそうつよく太陽の光が射たれて、わたしの魂はキリストの魂と重なり合ってゆき、虚無、闇、死、叫びを通しての放棄の道を識ったことに感謝しながら、ことばを書き留めてゆく作業は、わたしの祈りの道となるであろう。

Deo gratias Amen.

最後に まとめ

フォーリーニョのアンジェラの精神的放棄の回心の道において、虚無 Vanitas とは、自己の心身の感覚放棄とともにカミの存在をも感じられなくなってしまうこと、極限の沈黙というカミの不在「わたしのカミよ、わたしのカミよ、なぜわたしををお見捨てになるのか。なぜわたしを遠く離れ、救おうとせず、呻きも言葉も聞いてくださらないのか。わたしのカミよ、昼は、呼び求めても答えてくださらない。夜も、黙ることをお許しにならない。」(詩篇 22)

であり、まったくなにもないどん底に堕ちてゆく体験である。

闇 Tenebrae とは、アンジェラにとって何も感じなくなり、絶望の状況におちいってしまい、カミの光からも奪われ、遠ざかってしまった状況のことをいい、しかし、その闇は祈りによって信仰の希望を失われない。

死 Mors とは、キリストの十字架に架けられた姿にアンジェラ自身の絶望と苦しみを重ね合わせて、自身の十字架を背負って、キリストの最後の言葉「エロイ サバクタニ!」

の心境であり、「なぜに? どうして?」という自分のおかれている立場が透明ではない疑いのなか、なおも祈り、この顕世の肉体が朽ちてはても、キリストの復活の魂のよみがいりを信じるころである。

虚無、闇、死という精神的放棄の道は心身の凄まじい苦しみをともなうものであるが、いかに、なにも感じることもできない闇夜の境地に堕ちていっても、キリストの愛に導かれて、ひたすら祈ったフォーリーニョのアンジェラに励まされる。

」

Instruction III

La prière

「カミの光なくしては人間は救われない。カミの光こそが人間を始めさせ、カミの光は人間を進歩させ、カミの光によって、完全の頂へと導いてゆく。」

2025 年 3 月 31 日 アンジェ フランス 小泉友美 祈

フォーリーニョのアンジェラ Angela da Foligno の精神的放棄 Abandon spirituel

著 者 小泉友美 Koizumi Tomomi

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
